

京都女子大学図書館蔵「能双六」

——新蔵資料の紹介と小考——

川 島 朋 子

はじめに

京都女子大学図書館に令和三年度「能双六」が新蔵された。本稿はこの新資料を紹介すると共に、些かの考察を加えるものである。

まず本資料の書誌は、寸法が縦三五・〇cm×横四八・七cm、肉筆彩色一枚、江戸時代後期頃のものかと思われる。能の演目をモチーフとした絵双六で、全三十八マス、振り出しのマスを除き、三十七番の能の小道具、面、作り物等が描かれている。上りのマスの《式三番》（《翁》）のみ、翁と三番叟の舞姿が描かれる。

同様に江戸時代に作られた同じような趣向の双六には、法政大学能楽研究所蔵「能楽双六」、加賀本多博物館蔵「謡双六」がある。そうした作品とも比較して、本資料の特色と資料的価値を明らかにしていきたい。

一 絵双六としての機能

まず「能双六」が絵双六としてどのように用いられたのか、具体的に見ていきたい。縦に五段、横に八列のマスが並ぶので、以下、上から一〜五段、右から1〜8列として、段と列の数字を並べて各マスを示すこととする。「振り出し」は中央の3・4・5にあたる「能双六」と書かれたマスで、そこに「一 高砂」「二 大会」「三 蟬丸」「四 蟻通」「五 柏崎」「六 安宅」とあり、出た犀の目により、それぞれのマスに飛んで始める。各マスに数字と曲名が書かれており、出た賽の目により指定のコマに進むという「飛び双六」である。全ての数字が書かれているわけではないので、該当する数字がない場合は一回休むことになる。「上り」は上段中央、1・4・5にあたる《式三番》である。五段のうち、一番上の第一段は進むことのできる犀の目が二つずつ、二・三・四段目は三つずつ、一番下の五段目は四つずつ記される。基本的に下から上へ、多くの場合、同じ段での移動となるが、いくつか上の段へ上がる可能性がある。上から下への移動はほとんどない。「上り」の《式三番》につながるのは、両横のコマ1・3《道成寺》と1・6《望月》、1・8《葛城》、5・1《張良》である。上の段に進むにしても、一段か二段上がることがほとんどであるので、《張良》で六の目が出た場合は大当たりであったのだろう。《張良》のコマに進むのは、5・4《蟬丸》と5・7《大会》だが、どちらとも振り出しのコマにある曲なので、最短三回で上りということになる。遊戯としてあまりにあっけないが、確率としては決して高いものではなく、場合によっては、同じ段からなかなか抜け出せなくなることもあるので、一喜一憂しながら楽しめたのかもしれない。なお、最初に六が出て《安宅》から始めても、さらにまた六が出たら《道成寺》、次に一が出たら《式三番》という最短の経路を辿ることになる。曲の内容と、進む経路との間には、特に関連性は見いだせないように思われる。

さまざまに進む経路を辿ってみると、《邯鄲》と《不二太鼓》の二箇所「うた占」の指示が見えることに気付く。しかしこの双六には《歌占》のマスは見られない。では、一度も指示されない、進む経路に含まれない曲がないかと探してみると、左上の一八《葛城》は一度も出てこないことに気付く。《葛城》と隣の《葵上》のマスは一度破損し失われた部分に紙を貼り修復している箇所である。おそらく修復した際に《歌占》とあるべきところに《葛城》と誤って記されたものと思われる。

ところで《葛城》のコマに描かれた絵柄は、弓と幣である。しかし《葛城》にはこれらの道具は用いられない。能《葛城》の内容は、旅の山伏（ワキ）が雪の中で柴を携えた女と出会い、その家にもてなされ、女が山伏に祈祷を頼むが、その正体は葛城明神であったというものである。その道具としては、例えば国立能楽堂蔵「宝生流能作物図」雪をかぶった笠、負イ柴、萩の枝が、同所蔵「能作物・道具図」⁽²⁾にはやはり雪をかぶった笠、木の枝、天冠に付ける葛の蔓が描かれる。

このコマが《葛城》を示さないことは明白で、元は《歌占》であったこともまた確実であろう。しかしここに描かれるのは《歌占》の小道具でもない。歌占とは、弓の弦に歌を記した短冊をつけ、これを引かせて歌の意味から吉凶を占うことで、能《歌占》でも「短冊付キノ弓」が小道具として用いられる。弓の弦の部分に複数の短冊が付けられるもので、やはり前掲「宝生流能作物図」には、「弓四尺」と長さが示され、「短冊五枚にても七枚にても」とある。《葛城》のコマに描かれる弓と幣は、この「短冊付キノ弓」を誤解したものではないであろうか。双六の左上の部分が破損し、修復するまでにどれくらい時間があつたのか、どのような手順を踏んだのかは分からないが、弓に多くの短冊がついたもの、という記憶か記録に基づいて再現されたのではないかと想像する。弓の先の部分は残っているので、書き足して再現したものの、短冊をどう書き加えるかが分からなかったものであろうか。さらに曲名も分からな

くなっていたのであろう。《葛城》の替えの演出では幣が出ることもあるようで、描かれた幣から《葛城》としたのかもしれない。

ただし、この《葛城》のコマに進む経路はなく、また《歌占》が出た時点で移動先がなくなり、遊戯は成立しない。この修復が行われた頃には、実際に遊戯に使うことはなくなっていたのであろうか。

二 描かれる能の演目

では次に、この「能双六」に採られる能の演目について見ていきたい。各段ごとに右から順に並べると、次のようになる。

(本来は《歌占》)

- | | | | | | | | | |
|----|--------|---------|----------|------------|--------|----------|--------|---------|
| 一段 | 1 《唐船》 | 2 《邯鄲》 | 3 《道成寺》 | 4・5 《式三番》 | 6 《望月》 | 7 《葵上》 | 8 《葛城》 | |
| 二段 | 1 《鉢木》 | 2 《松風》 | 3 《文学》 | 4 《忠則》 | 5 《桜川》 | 6 《不二太鼓》 | 7 《海士》 | 8 《小鍛冶》 |
| 三段 | 1 《箆》 | 2 《三輪》 | 3 《井筒》 | 4・5 (振り出し) | 6 《石橋》 | 7 《熊野》 | 8 《実盛》 | |
| 四段 | 1 《安宅》 | 2 《柏崎》 | 3 《自然居士》 | 4 《楊貴妃》 | 5 《鉄輪》 | 6 《野守》 | 7 《是界》 | 8 《高砂》 |
| 五段 | 1 《張良》 | 2 《放下僧》 | 3 《蟻通》 | 4 《蟬丸》 | 5 《綱》 | 6 《道明寺》 | 7 《大会》 | 8 《融》 |

これらの曲について、江戸時代における演能記録を、国文学研究資料館のホームページで公開されている「連歌・演能・雅楽データベース」⁽³⁾により調べると、《高砂》(七三七件)、《三輪》(三四二件)、《道成寺》(二六九件)など上演回数も多い曲が多数採られていると思われる。その中であって二・三《文学》(《文覚》)はこれらの演能記録には一度も記録のない番外曲である。

徳川五代將軍綱吉、六代將軍家宣の時代には、多くの稀曲が上演されていることは既によく知られている。この双

六に見える《鉢木》《蟬丸》、もとあった《歌占》もその時期に復活し、その後は所演曲として定着した曲である。後の表にデータベースによる演能回数全数、綱吉將軍就任以後の演能回数、その割合を示した。曲により事情は異なるが、綱吉以降上演が増える曲には先に挙げたもの以外に《石橋》《放下僧》などがある。さて《文覚》もまたその時代に復活上演された曲であるが、これらの演能データベースには上演記録は見いだせない。ただし稀曲の上演も多く見られる鳥取池田藩の演能記録の中には、宝永八年（一七一―）三月二日、正徳元年（一七一―）十二月二十一日、正徳三年（一七一―）五月晦日に演ぜられた記録が見える。⁴ 表章氏によれば、鳥取池田藩の演能も含め、《文覚》については七例の上演記録が見られるという。⁵

諸流の所演曲を幕府に提出した『寛文元年五座諸流演目書上』⁶に全く見えない曲は《文学》と《蟬丸》のみ、『享保九年書上』⁷では《蟬丸》が加えられているので、唯一書上にも見えないのが《文学》である。

《文覚》は《六代》とも《六代文覚》ともされる曲である。元禄二年版三百番外百番ほか、複数の番外謡本が残る。平維盛の子の六代御前が、北条時政（ワキ）に捕えられ駿河千本松原で殺されようとした時、文覚（シテ）が頼朝の赦免状を受けてかけつけ、六代を助けるという内容の作品である。

江戸初期成立とされる能型付である『岡家本江戸初期能型付』⁸には《文学》の詳細な型付が記されており、《文学》の型付の中で、後ジテ（文覚）登場場面に、

文学出る。シテ、水衣。大口。角ぼうし、前に替てきる。守懸る。むち、腰にさす。笠をきる。

とあり、「笠」を着ていることが分かる。またその後六代を救う場面で、

さて御教書袋を取、時政にやる。受取、文を脇持。：（中略）：シテ柱ノ前にて、脇文よむ。

とあり、文覚が渡した「文」をワキ（時政）が読むという所作がある。《文学》のコマに描かれる「菅笠」「文」は、

確かに《文学》で使われる道具なのである。

藤岡道子氏はこの型付に《文学》をはじめとする稀曲が含まれることについて、

元禄期前後に綱吉・家宣時代の稀曲復活の機運に乗じて復活されたい曲である。これらの曲については、…（中略）…卷五^⑨文学などのように長文のものもあり、…（中略）…一〜三行程度のものもある。入手経路や入手時期が一定であったとは考えにくく、『岡家蔵江戸初期能型付』の原編纂時期と考えられる江戸初期に収集されたかも知れない。綱吉・家宣時代の稀曲復活に呼応して、その時代に収集されたものが増補された可能性も考えておかねばならないだろう。^⑨として

「能双六」の成立も《文学》などが復曲された時期より後であることは間違いない。ただ所演曲としては定着しなかった《文学》が含まれることは、この双六の大きな特徴でもあろう。あえてこの曲を入れることは、作成を依頼した人物の希望であったのかもしれないが、もしその理由が説明できれば制作の意図も知ることができよう。しかしながら現在までの調査においては、それを説明する根拠を持たない。

なお、《忠度》を《忠則》、《羅生門》を《綱》と表記することは多くの例が見られるが（どちらも『岡家本江戸初期能型付』とも共通する）、《富士太鼓》を《不二太鼓》と表記する例はあまり多くない。「享保六年書上」^⑩で金剛座の所演曲の中に「不二太鼓」の表記があることを指摘しておく。大きな問題ではないかもしれないが、今後基づいた資料、流派について考える上で留意しておきたい。

三 「能楽双六」「謡双六」との比較

室町時代の浄土双六が始まるとされる絵双六であるが、江戸時代には一枚摺りの絵双六も多く作られている。中には歌舞伎の役者などを仕立てたものは多く見られるが、能を題材として取り上げたものとしては、管見の限り、東京都立図書館蔵の「高砂小謡廻双六」「新略謡番与双六」⁽¹¹⁾の二点しか見当たらなかった。近代に入ると、国立能楽堂所蔵「諸流能楽寿語録」(木版画。明治四十四年(一九一)、江島書店刊(再版)⁽¹²⁾)などがある。今後これらの双六も含め調査していきたいが、本稿では「能双六」同様に能(狂言)をその使用する道具や作り物等で表現するという手法を採る、法政大学能楽研究所蔵「能楽双六」と加賀本多博物館蔵「謡双六」に限定して比較し検討していきたい。

●法政大学能楽研究所蔵「能楽双六」

縦三〇・四cm×横一八・二cmだが、三つに折りたたんで表と裏に厚紙を貼った大きさで、広げると縦横とも一〇〇cmを超える大きさである。令和三年度国立能楽堂企画展『小道具から見る能』⁽¹³⁾の図録に小田幸子氏の資料解説があり「肉筆彩色入りの双六。厚手斐楮紙交漉紙」また「筆者不明」とする。全三十八コマ。採られる曲は以下の能十九番(ほかに狂言十六番)(傍線は「能双六」と重なる曲)

《翁》(千歳) (三番叟) 《高砂》《松風》《望月》《放下僧》《小督》《烏帽子折》《鞍馬天狗》《安宅》《井筒》《舟弁慶》
《熊野》《昔刈》《道成寺》《是界》《邯鄲》《石橋》《鉢木》《猩々》

右下のコマの能舞台の図が振り出しで、その左に「翁」「千歳」「三番叟」のコマが続く。基本的には回りながら中央の《猩々》(上り)まで進むが、各コマに記された犀の目により、進むコマが決まる。「飛び双六」と「廻り双六」

の要素を併せ持った「飛び廻り双六」に分類されるものである。《翁》に始まり、最初に脇能《高砂》があり、能と狂言が交互に描かれ、「上り」は五番目物《狸々》と、江戸時代の五番立の番組を意識しているものかとも思われる。上りの《狸々》のみ、舞姿が描かれるが、背景は海辺の実景である。「祝言 上り 狸々」とあり、人物の傍らには盃が置かれる。

取り上げられる能十九番のうち十三番は《翁》（《式三番》）含め、「能双六」と重なる。やはり上演頻度も高い人気曲が選定されていると言えよう。「能双六」と比較した際の「能楽双六」の特色は、

・《実盛》《忠度》のような修羅能（二番目物）がないこと

・《葵上》《鉄輪》《野守》のような鬼物、鬼女物が少ないこと（《道成寺》のみ）

という二点である。このような点を考えると、「能楽双六」は祝言性を意識した選曲が行われていると考えられる。

●加賀本多博物館蔵「謡双六」能九十四番（ほかに狂言四十二番）

加賀藩に仕えた家老「加賀八家」の筆頭、本多家に伝わるもので、縦一二九・〇cm×横一二九・七cm¹⁴の豪華な双六である。右下の《翁三番叟》（振り出し）から中央の《石橋》まで進む、「廻り双六」である。能二三番ごとに狂言が一人入る。図録『藩老本多蔵品館』¹⁵の解説および加賀本多博物館の展示キャプションによると、「左へまわりながら自分の止まった面に書かれた題の謡曲を謡い」コマを進めていったようである。取り上げられる能は以下の九十四番である。（ほかに狂言四十二番）（傍線は「能双六」と重なる曲）

- 《翁三番叟》《高砂》《箴》《杜若》《枕慈童》《鉢木》《小鍛冶》《養老》《通盛》《藤》《鍾馗》《紅葉狩》《蟬丸》《鶴
亀》《忠度》《井筒》《安宅》《鉄輪》《藤栄》《加茂》《熊坂》《熊野》《善知鳥》《花筐》《鶉飼》《竹生島》《巴》《野々

宮》《綾鼓》《黒塚》《玉井》《田村》《半部》《木賊》《雷電》《難波》《敦盛》《草子洗》《葵上》《張良》《蟻通》《女郎花》《葛城》《殺生石》《白樂天》《船橋》《羽衣》《自然居士》《車僧》《氷室》《八島》《江口》《望月》《松山鏡》《呉羽》《盛久》《芭蕉》《百万》《羅生門》《歌占》《邯鄲》《経政》《松風》《夜討曾我》《一角仙人》《桜川》《金札》《橋弁慶》《三輪》《三井寺》《融》《絵馬》《清経》《遊行柳》《小督》《鶴》《嵐山》《土蜘蛛》《胡蝶》《芦刈》《西王母》《頼政》《東北》《道成寺》《白髭》《高野物狂》《三笑》《鶏籠田》《雨月》《実盛》《大原御幸》《二人静》《放下僧》《唐船》《猩々》《石橋》

《翁三番叟》に始まり、脇能《高砂》が続くのは、能研蔵「能楽双六」とも共通しており、上りはやはり五番目物の《石橋》で、やはり五番立の番組を意識しているものである。 「能楽双六」とは異なり、修羅能も複数含まれ、曲籍に偏りはない。

遠藤貴子氏は「小袖模様雛形本にみる謡曲意匠の研究…古典文学を資料として」⁽¹⁶⁾の中で、小袖模様雛形本と「謡双六」の意匠の近さを指摘している。「謡双六」は曲によっては能に使われる面や道具類だけでなく、その能の舞台となる実景を描いているコマもある。

「能双六」と二十九番が重なり、第一章で取り上げた《葛城》と《歌占》がどちらも含まれるが、《葛城》は笠、負イ柴、篠掛、《歌占》は烏帽子、短冊付キノ弓が描かれ、演出資料と近く、「能双六」とは一致しない。

「能楽双六」「謡双六」と比較すると「能双六」のみに見られる曲は、

《文学》《不二太鼓》《海士》《柏崎》《楊貴妃》《野守》《道明寺》《大会》

の八番に過ぎない。多く、双六の題材として共通した曲が用いられる傾向が強いが、これらの曲の選定は、「能双六」

の特色であると言えるのかもしれない。

また豪華な仕立ての「能楽双六」「謡双六」に比べて、「能双六」は寸法も小さく紙も一般的な楮紙で、所有された層の違いが感じられる。「能双六」のようなものは破損しやすく、残されにくい物であると思われる、他にもこういったものは作られていたのではないか。修復してまで保管されてきたことを見ると、所有者（または家）にとって思い入れの強い大切な品であったのかと思われる。

四 能の絵画資料としての資料価値

能や狂言に関わる絵画資料の研究は、特に近年注目され進んできている。宮本圭造氏は「能・狂言と絵画―描かれた能・狂言の系譜^①―」（『能楽研究』第三十七号 二〇一三年三月）で能・狂言と関わる絵画を以下のような六種類に分類している。

- A 芸を伝えるための絵画
- B 役者の面影を記憶する絵画
- C 風景の一つとして演能を描く絵画
- D 能・狂言の舞台を描く絵画
- E 能の興行を記録する絵画
- F 能の物語を描く絵画

またこれ以外に「能の作品世界の意匠化や見立ての問題がある」とし、

そうした象徴的景物を用いて能・狂言を絵画化した作品の具体例として、能のカルタや双六が挙げられよう。そ

の多くは大名家や公家の旧蔵品で、過半は江戸後期から幕末にかけての制作らしい。とする。また小林健二氏はこの分類を受け、

宮本氏はさらに能楽を題材としたカルタや双六などの遊戯具も能・狂言画の系譜に連なるものと述べているが、首肯される説でGとして立項してよいと思われる。

と述べている。⁽¹⁸⁾では能の絵画資料として見た際に、本資料の資料的価値はどのようなところにあるだろうか。

本資料では能の作り物、道具などをそれぞれの曲の象徴として描いている。宮本氏は、

能楽研究所にも、江戸後期頃制作の能楽双六が所蔵されているが、そこでは作り物や面・装束などを描いて、曲名を暗示する手法がとられており、能・狂言のピクトグラムの様相を示している。

とする。「能双六」においてそれぞれの能の象徴として描かれている道具については後にまとめたが、型付などの演出資料と照らし合わせると、概ねそれぞれの能で使われているものを忠実に描いている。作り物や道具、装束、面といったアイテムによってそれぞれの曲が特徴付けられるのも能ならではの点である。ここに描かれた絵が何によったものかは分からないが、演出資料の一つとして用いることも可能なのではないか。例えば《三輪》の作り物、《柏崎》の持ち箆のように、見慣れない物もある。もちろん全てを実際に使われた道具として見るべきではなく、他の型付や作り物図などと照合しながら、検討する必要があるだろう。その点は今後の課題としたいが、「能双六」に《文覚》の道具が描かれる点は、稀曲の演出資料として貴重なものと言えるのではないであろうか。

本資料の特色としては、能の道具を描いた双六が、「能楽双六」や「謡双六」のような「大名家や公家」の階層による享受にとどまらず、もう少し広い層に享受されていた可能性があることを示していると言えよう。その筆致は「能楽双六」「謡双六」に比べるとやや稚拙であり、とりわけ面の描写には顕著であることは確かである。ただその内容に

目を向けると、絵画資料としてやや不審な点はあるものの、概ね実際に使われた道具や装束に忠実に描かれているものと思われる、絵画資料としての一定の価値は認めてよいのではないかと思われる。

「能双六」各マスの内容

*それぞれのマスの内容と描かれる道具についての考察、丸数字で出た犀の目を示し、その移動先を整理した。同じ段での移動が大半であるので、段を移動する箇所のみ太字で示している。

作り物、道具、装束等の名称については、『岩波講座 能・狂言』別巻 能楽図説（一九九二年・岩波書店）によつた。

一 1 唐船 舟の作り物、櫂竿

① 一 2 邯鄲 ② 一 7 葵上

一 2 邯鄲 唐団扇、枕

小道具の枕は、四角ではなく円筒形に描かれる。

① 一 3 道成寺 ② 一 8 歌占（葛城）

一 3 道成寺 前折烏帽子、中啓

① 一 4・5 式三番（上り） ② 一 1 唐船

一 4・5 式三番(翁) 上り 翁、三番叟の舞姿

一 6 望月 扇、赤頭

① 一 4・5 式三番(上り) ② 一 3 道成寺

一 7 葵上 打千杖、般若の面

① 一 6 望月 ② 一 3 道成寺

一 8 葛城(歌占) 弓、幣

① 五 6 道明寺 ② 一 4・5 式三番(上り)

二 1 鉢木 薙刀、鞭

① 二 6 不二太鼓 ③ 二 4 忠則 ④ 二 8 小鍛冶

二 2 松風 風折烏帽子、長絹

② 二 3 文学 ③ 二 7 海士 ④ 一 7 葵上

二 3 文学 菅笠、文

③二5 桜川 ④二4 忠則 ⑤二6 不二太鼓

二4 忠則 短冊付キノ矢

②二8 小鍛冶 ③二6 不二太鼓 ④一1 唐船

二5 桜川 掬イ綱

②二6 不二太鼓 ③二8 小鍛冶 ④二7 海士

二6 不二太鼓 烏兜、撥

④二1 鉢木 ⑤二4 忠則 ⑥一8 歌占(葛城)

二7 海士 経巻、竜戴、黒垂

④二2 松風 ⑤二3 文学 ⑥一1 唐船

二8 小鍛冶 注連横張りノ一畳台

③二1 鉢木 ④三2 三輪 ⑤一7 葵上

三1 箆 梅ノ持子枝、梨子打烏帽子

③三二 三輪 ④三六 石橋 ⑤三八 実盛

三二 三輪 小屋（引回シ掛ケ）

国立能楽堂蔵「能作物・道具図」「宝生流能作物図」には、杉の葉が立てられ幣が掛けられた作り物が描かれ、短冊がつけられている。通常《三輪》の作り物は「杉立テ小屋」と呼ばれるものである。「引回シ」が掛けられているので、前場における作り物を描いたものか。

③三三 井筒 ④三七 熊野 ⑤一 二 邯鄲

三三 井筒 初冠、若女の面

③三七 熊野 ④三六 石橋 ⑤三八 実盛

三四・五 振り出し

①高砂 ②大会 ③蟬丸 ④蟻通 ⑤柏崎 ⑥安宅

三六 石橋 牡丹

②三七 熊野 ④三三 井筒 ⑤一 六 望月

三七 熊野 舟の作り物、文

③三 1 箆 ④三 3 井筒 ⑤二 1 鉢木

三 8 実盛 三光尉の面、数珠

③三 6 石橋 ④三 2 三輪 ⑤二 3 文学

四 1 安宅 笈、金剛杖、兜巾

③三 7 熊野 ④四 3 自然居士 ⑥一 3 道成寺

四 2 柏崎 持子笹（文、短冊付）

文と短冊の付いた持ち笹は、例がない。

③四 8 高砂 ④四 7 是界 ⑤三 8 実盛

四 3 自然居士 羯鼓、数珠

③四 3 楊貴妃 ④四 5 鉄輪 ⑤三 8 実盛

四 4 楊貴妃 中啓、天冠

③四 6 野守 ④四 8 高砂 ⑤二 7 海士

四 5 鉄輪 幣、鬘

③ 四 7 是界 ④ 四 8 高砂 ⑤ 四 2 柏崎

四 6 野守 杖、鏡

③ 四 4 楊貴妃 ④ 四 1 安宅 ⑤ 三 2 三輪

四 7 是界 篠掛、数珠

③ 四 8 高砂 ④ 四 3 自然居士 ⑤ 三 7 熊野

四 8 高砂 杉箒、サラエ

③ 四 6 野守 ④ 二 1 鉢木 ⑤ 二 4 忠則

五 1 張良 経卷、沓

③ 五 2 放下僧 ④ 五 3 蟻通 ⑤ 五 5 綱 ⑥ 一 4・5 式三番(上り)

五 2 放下僧 弘子ニ団扇付キノ拄杖

③ 五 4 蝉丸 ④ 五 8 融 ⑤ 五 7 大会 ⑥ 五 6 道明寺

五 3 蟻通 長柄傘、火綿付キノ松明

③ 四 1 安宅 ④ 五 5 綱 ⑤ 五 4 蟬丸 ⑥ 五 8 融

五 4 蟬丸 琵琶

③ 五 1 張良 ④ 五 7 大会 ⑤ 四 7 是界 ⑥ 五 6 道明寺

五 5 綱(羅生門) 打子杖、黒頭、鍬形

③ 五 7 大会 ④ 五 6 道明寺 ⑤ 五 8 融 ⑥ 五 4 蟬丸

五 6 道明寺 中啓、木櫨樹

③ 五 8 融 ④ 四 8 高砂 ⑤ 五 7 大会 ⑥ 五 3 蟻通

五 7 大会 羽団扇、数珠

③ 五 2 放下僧 ④ 五 1 張良 ⑤ 五 3 蟻通 ⑥ 四 3 自然居士

五 8 融 田子

③ 五 4 蟬丸 ④ 五 7 大会 ⑤ 四 2 柏崎 ⑥ 一 3 道成寺

注

- (1) 『国立能楽堂収蔵資料図録〈1〉 文献・絵画Ⅰ』(二〇〇一年・国立能楽堂)
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 「元禄御能組」「古乃御能組」「大坂勸進能番組」「寛文御能組」「寛永雜記」「將軍宣下能番組」「尾張藩招待能番組」「尾張藩能組」「御城御能諸家能囃子之扣」「御城諸家御能組」「日光仙洞御能組」「日光御社参祝儀御能組」「江戸初期能組控え」「能之留帳」「薪能」「触流し御能組」に基づく。
- (4) 田中貢・永井猛「鳥取池田藩演能記録―正徳三年(二七二三分)―」『藝能史研究』一三三号(一九九六年四月・藝能史研究会)
永井猛「鳥取池田藩演能記録―宝永八年・正徳元年(二七一一分)―」『藝能史研究』一八四号(二〇〇九年一月・藝能史研究会)
- (5) 表章「能の変貌―演目の変遷を通して―」『中世文学』35号(一九九〇年六月・中世文学会)
- (6) 注(5)による。
- (7) 法政大学能楽研究所編 能楽資料集成7『萬聞書』(一九七七年・わんや書店)
- (8) 藤岡道子編『岡家本江戸初期能型付』(二〇〇七年・和泉書院)
- (9) 注(8) 解題
- (10) 藝能史研究会編『日本庶民文化史料集成 三 能』(一九七八年・三一書房)
- (11) 東京都立図書館ホームページによる。
- (12) 『国立能楽堂収蔵資料図録〈2〉 文献・絵画Ⅱ』(二〇〇一年・国立能楽堂)
- (13) 令和三年度国立能楽堂企画展『小道具から見る能』(二〇二一年十一月・独立行政法人日本芸術文化振興会)
- (14) 加賀本多博物館にてご教示いただいた。
- (15) 『藩老本多蔵品館』(藩老本多蔵品館)
- (16) 二〇一七年博士論文(筑波大学 12102 甲第 8418 号)
- (17) 『能楽研究』第三十七号(二〇一三年三月・法政大学能楽研究所)

(18) 小林健二『描かれた能楽―芸能と絵画が織りなす文化史』序 能楽の絵画資料研究を拓く(二〇一九年・吉川弘文館)

〈参考文献〉

増川宏一 ものと人間の文化史 79―II 『すごろくII』(一九九五年・法政大学出版社)

兵庫県立歴史博物館『入江コレクション1 絵双六』(二〇〇六年・兵庫県立歴史博物館)

榎田静代『絵双六―その起源と庶民文化』(二〇一四年・京阪奈情報教育出版)

中前正志『列僊寿娯禄』が仕掛けた説話の擬似体験―付、〈粗描〉久米仙人墜落説話利用略史―

『国文論藻』第十六号(二〇一七年三月・京都女子大学大学院文学研究科)

〈付記〉

今回の短期間の調査では、絵双六に関しても能の演出資料に関しても、全てを広く見渡すことができていない。十分な考察であることは承知の上で、まずは京都女子大学図書館に所蔵されることとなった新資料「能双六」を広く紹介し、能の絵画資料研究の一助となればと願う次第である。

貴重な資料の閲覧をお許しいただき、またご教示いただいた、法政大学能楽研究所、加賀本多博物館、絵画資料についてご教示いただいた藤岡道子氏に記して御礼申し上げます。

昨年急逝された山崎(正木)ゆみ教授には、同じ芸能を担当する者として多くのことをお教えいただき、また公私に渡り大変お世話になった。謹んでお悔やみ申し上げますとともに、本稿を山崎先生の御霊前に捧げます。

「能双六」翻刻

京都女子大学図書館蔵「能双六」



| 8列 | 7列 | 6列 | 5列 | 4列 | 3列 | 2列 | 1列 | |
|--------------------|----------------------------|--------------------------|--------------------------|----------------------------|---------------------------|----------------------------|----------------------------------|----|
| 葛城 二式三番 一道明寺 | 葵上 二道成寺 一望月 | 望月 二道成寺 一式三番 | 式三番 | | 道成寺 二唐舟 一式三番 | 邯鄲 二うた占 一道成寺 | 唐舟 二あふひの上 一邯鄲 | 一段 |
| 小鍛冶 四三三 五葵上 | 海士 五文かく 六唐せん | 丕太鼓 五忠則 六うた占 | 桜川 三小かち 四あま | 忠則 三ふし太こ 二小鍛冶 四唐船 | 文学 四忠のり 五ふし太こ | 松風 三あま 四葵上 | 鉢木 三忠則 四小かち 二もん学 | 二段 |
| 実盛 四三三 五文かく | 熊野 四あつゝ 五はちのき | 石橋 四あつゝ 五望月 | 六双能 | | 井筒 四石橋 五さねもり | 三輪 四ゆや 五かんたん | 箆 四石きやう 五さねもり 三三輪 | 三段 |
| 高砂 四鉢木 五忠則 | 是界 四自然居士 五ゆや | 野守 四あたか 五三輪 | 鉄輪 四高砂 五かしはさき | 楊貴妃 四高さこ 五あま 三野守 | 自然居士 四かなわ 五さね盛 | 柏崎 四せかい 五実もり | 安宅 四自然居士 六道成寺 三ゆや | 四段 |
| 融 四大会 六道成寺 | 大会 四長良 五あり通 六自然居士 | 道明寺 四高砂 五大糸 六蟻通 | 綱 四道明寺 五とをる 六蟬丸 | 蟬丸 四大糸 五せかい 六道明寺 | 蟻通 四つな 五せみ丸 六とをる | 放下僧 四とをる 五大糸 六道明寺 | 張良 四蟻通 五つな 六式三番 三放下僧 | 五段 |

「能双六」に採られる能の上演回数と書上における状況

江戸時代の上演回数、綱吉将軍就任後の上演回数とその全体における割合、寛文元年と享保九年の書上に見えるか否かを示した。

(上演回数は演能データベースによる。)

| 曲名 | A 江戸時代 上演回数 | B 綱吉以後 上演回数 | B/A | 寛文書上 | 享保書上 |
|-------------|----------------|----------------|------|------|------|
| 唐船 | 41 | 32 | 78% | ○ | ○ |
| 邯鄲 | 167 | 66 | 40% | ○ | ○ |
| 道成寺 | 269 | 120 | 45% | ○ | ○ |
| 望月 | 52 | 44 | 85% | ○ | ○ |
| 葵上 | 220 | 83 | 38% | ○ | ○ |
| 葛城 | 45 | 33 | 73% | ○ | ○ |
| 歌占 | 34 | 31 | 91% | ○ | ○ |
| 鉢木 | 84 | 60 | 71% | ○ | ○ |
| 松風 | 229 | 78 | 34% | ○ | ○ |
| 文覚 (文学) | 0 | 0 | 0% | × | × |
| 忠度 (忠則) | 241 | 119 | 49% | ○ | ○ |
| 桜川 | 87 | 58 | 67% | ○ | ○ |
| 富士太鼓 (不二太鼓) | 92 | 45 | 49% | ○ | ○ |
| 海士 | 99 | 72 | 73% | ○ | ○ |
| 小鍛冶 | 30 | 22 | 73% | ○ | ○ |
| 箆 | 179 | 156 | 87% | ○ | ○ |
| 三輪 | 342 | 159 | 46% | ○ | ○ |
| 井筒 | 144 | 53 | 37% | ○ | ○ |
| 石橋 | 85 | 83 | 98% | ○ | ○ |
| 熊野 | 285 | 83 | 29% | ○ | ○ |
| 実盛 | 238 | 90 | 38% | ○ | ○ |
| 安宅 | 133 | 92 | 69% | ○ | ○ |
| 柏崎 | 138 | 51 | 37% | ○ | ○ |
| 自然居士 | 247 | 75 | 30% | ○ | ○ |
| 楊貴妃 | 78 | 26 | 33% | ○ | ○ |
| 鉄輪 | 28 | 21 | 75% | ○ | ○ |
| 野守 | 175 | 69 | 39% | ○ | ○ |
| 是界 | 120 | 79 | 66% | ○ | ○ |
| 高砂 | 737 | 419 | 57% | ○ | ○ |
| 張良 | 145 | 74 | 51% | ○ | ○ |
| 放下僧 | 83 | 76 | 92% | ○ | ○ |
| 蟻通 | 41 | 34 | 83% | ○ | ○ |
| 蝉丸 | 28 | 28 | 100% | × | ○ |
| 羅生門 (綱) | 94 | 43 | 46% | ○ | ○ |
| 道明寺 | 19 | 13 | 68% | ○ | ○ |
| 大会 | 40 | 25 | 63% | ○ | ○ |
| 融 | 224 | 138 | 62% | ○ | ○ |